

— 書 評 —

そもそも島に進化あり

川上和人 264 頁
2016 年 8 月 技術評論社
1,880 円 + 税
ISBN: 978-4-7741-8250-6

評者主宰のゼミでは新たに所属した学部生には、文章作成能力向上の契機に書評をさせている。出来上がってきたものの多くは、今回のように書籍紹介に近く、そのような演習に付き合わされる本書著者、川上氏および本誌編集委員会とその読者には甚だ迷惑な話ではあろう。ただし、川上氏は本ゼミ研究論文に共著者の一人として加わって頂いていたこともあるので (Yoshino et al. 2011)、一定の理解を示して下さるものと楽観し (甘えて) いる。また、本ゼミのテーマの一つが離島における内部寄生虫の生物地理であるので (たとえば、浅川 1998; 坂田ら 2003, 2006; Sakata et al. 2005; 古瀬ら 2016 など)、本書から何らかの示唆が得られるものとも期待させて頂いた。そのようなことから、まず、前半にゼミ生が概要を紹介し、後段でそのような期待に応えて頂いたのかどうかを確認したい。

(文責 浅川)

本書は第 1 章「島が世界に現れる」、第 2 章「島に生物が参上する」、第 3 章「島で生物が進化する」、第 4 章「島から生物が絶滅する」および第 5 章「島が大円団を迎える」から構成されていた。

まず、第 1 章では大陸島・海洋島がどのように誕生するのか、それぞれの生物相の遍歴が異なる理由はなぜかについて紹介していた。そして、次の章では海という障壁を生物がどのように乗り越え、島に辿り着いたのかという話を展開していた。著者は鳥類学者だが、エピソードの中心は鳥ではなく、鳥の移動に付随する微小な昆虫や貝などの定着であった。こういった無脊椎動物は、ある種の寄生虫にとっては中間宿主として生活史のうえで不可欠な生き物である。なので、島に新たに定着したような寄生虫の来歴にもヒントを与えてくれるのかなと感じた。ともかくも、様々な移動手段のやり口に感心をさせられると同時に、多くの偶然が積み重なり島に定着できた生物達のドラマの一端を垣間見ることができた。海に取り残され

た陸地にも関わらず、一体どこからやってきたのだろうという素朴な疑問もこの章を読めば解決されると思われた。

第 3 章では、いよいよ「役者」が揃った島という舞台上、彼らがどのように繁栄していくかを生き生きと描いていた。ただし、著者は舞台進行上、基本的な専門用語の概念を観客に予め理解をしておいてもらわないとならないと感じたようだ。進化や多様性など何処かで聞いたことはあっても、あらためて説明するのが難しい用語を身近な例に例えて、非常に分かり易く解説しており、専門知識が無くてもスムーズに読み進めることができるであろう。本書の要の一つである島における独特の生物相形成の理由もこの章で説かれていた。そして、第 4 章では島が直面している危機について述べられる。面積が小さく、海によって隔離されているという島の特徴はユニークな生物相を育み、同時に脅威が起こった場合には易々と逃れられないという弱点にもなっていた。開発や外来種台頭といったよく耳にする問題は、島という特殊な環境ではより深刻な問題となり得る。特に、外来種の問題については、実際の例を紹介しながら深く掘り下げられていた。したがって、「外来種は何が問題なのか」という疑問を持つ方にも、是非読んで頂きたい。そして、「なぜ生態系を守らねばならないのか」という答えも、著者なりに踏み込んで結論付けられていた。

最終章は、著者の島についての夢物語が語られると共に、今まで述べられてきた島というものについてのおさらいをする場であった。島の環境は特殊だが、類似した環境は身近にもあふれていることを本章では気付かせてくれた。

著者は本書を教科書ではなく島のガイドブックであると謳っており、専門的な内容もアニメなどの内容に例えられながら解説している。たとえ生物自体に興味が無い読者であっても無理なく楽しむことが出来ると思う。評者も読後、自分には縁遠かった島が身近に感じられ出かけたくなった。島は長い時間と偶然の積み重ねによる自然の産物であり、その過程に島の魅力やロマンが詰まっているのだとの著者のおもいに共感出来た。多くの人が本書を読み、地球の縮図とも云える島への思いを馳せてほしいと思う。

(文責 内匠)

評者らは (材料の制約がかからない) 身近な動物で地史の桎梏から逃れることが出来ない野ネズ

ミ類の宿主特異的な寄生線虫の島における存否に関心を持っている。内部寄生虫ではあっても、幼虫の一時期は外界で生活をするし、島であるがゆえに宿主自体の個体群動態もメインランドより強度になるかも知れない。もし、絶滅に近い状態にまで宿主の個体数が減れば、感染幼虫が感染する機会も減じ、寄生虫の絶滅が起きるかもしれない。まさに著者が本書内で説明をしていた島固有の何らかの性質が大きく反映するとの前提で調べている。が、評者の絶対的な力不足から、ゼミ生にこのような背景が理解されているとは、到底、信じられない。そうすると、研究の面白みを欠如したまま作業だけ進む。その点、上記で述べられているように、島の生物地理に関してのイロハがほぼ完璧に言及され、島の寄生虫相研究の醍醐味が、たとえ新人ゼミ生であっても短時間で効果的に理解させるものであった点は、研究指導者として大助かりであった。その手法が生物学とは無関係な事象も含めた巧みな比喩的な表現による軽妙な語り口であった。特に、著者自身が専門とする鳥類のみならず（むしろ、分量面では圧倒的に少ない）、アニメを含む映画、洋の東西の古典、児童書、社会事情を表現するギャクを含むサブカルチャー的要素までも巧みに織り込んでいた。ただ、評者が上記のような理由から、まず読んで欲しい20代前半（2017年時点）の学部4年生には追従出来ない部分が散見された。たとえば、著者が愛する単車は往年に比して、明らかに若者の乗り物では無くなったので、いくら鳥類との解剖学的な共通点を強調されても難しいであろう（面白い視点ではあるし、同じく単車が好きな評者は、絶対に、どこかで引用させて頂くが）、まあ、そうではあっても、これだけ著者自身の興味を最優先かつ前面に上梓された点は、後に続く若手（ばかりではないけど）研究者に、きっと単行本刊行の勇気を与えたことであろう。

気になった小さな点として、64頁から次の頁に、縄文海進時におけるブナ北上にカケスが種子散布の要因であった説を紹介された。もちろん、文脈から頭が白い本州のカケスであろうが、その当時も道南に生息していたと想像されるミヤマカケスとの間で何らかのコンフリクトは無かったのだろうか。北海道に居住するものは評者を含め、きっと気になるところであろう。また、142頁以降の電車座席のエピソードもやや思考に混乱を生じせしめた。座席を資源（ニッチ）と見立て異種間関係、種数の希少性あるいは適応放散を論ずる

パートなので、むしろ、144頁のキツツキやキツネのエピソードを先に出した方が分かり易いような印象を受けた。電車座席の奪い合いは同種（ヒト）間における資源（環境収容力）の奪取に近く、そうすると（評者のような生半可な）読者は個体数（個体群）やその動態などの話題の導入と勘違いするものもいるだろう。ただし、これも次を丁寧に読み解けば問題は無い。

なお、著者と著者らのゼミ研究とで関わった契機は、島の寄生虫相の生物地理ではなく、外来性鳥類の寄生虫保有状況の調査であった（Yoshino et al. 2011）。まさに、外来種研究に「徴兵」された（231頁）研究仲間なのであった。いや、そればかりではない。時効だから記すが、評者が心ならずも巻き込まれてしまったスズメ大量死問題（福井・浅川 2016）では「大人の事情」（228頁）を鑑みた見事な対応をして頂いた。図らずも本書を拝見しながら追想させて頂いたことを、最後に申し添える。

（文責 浅川）

内匠夏奈子・浅川満彦
（酪農学園大学 獣医学群）

引用文献

- 浅川満彦 (1998) 離島に生息する野ネズミの寄生線虫—特に絶滅現象に着目して。北海道森林保全協会創立 50 周年記念誌「50年の歩み」: 63–64。北海道森林保全協会, 札幌。
- 福井大祐・浅川満彦 (2016) 餌づけがもたらす感染症伝播—スズメの集団死の事例から。畠山武道 (監) 小島望・高橋満彦 (編) 野生動物との軋轢を回避するために—保全生態学的アプローチからの「餌付け問題」: 167–177。地人書館, 東京。
- 古瀬歩美・高田靖司・浅川満彦 (2016) 瀬戸内海の島に生息するアカネズミ *Apodemus speciosus* (齧歯目ネズミ科) の寄生蠕虫類。酪農大紀自然 40: 109–112。
- 坂田金正・新垣英美・蔭山麻里子・本川雅治・浅川満彦 (2003) トカラ列島口之島および中之島産アカネズミ *Apodemus speciosus* (Temminck) の消化管から得られた寄生蠕虫類の種構成の特色。沖縄生物学会誌 41: 1–5。
- Sakata K, Takada Y, Kageyama M, Tenora F & Asakawa M (2005) Parasitic helminths obtained from the genus *Apodemus* (Muridae: Rodentia) collected on the Oki Islands,

Shimane Pref., Japan, with a new host record of *Heligmosomoides kurilensis* from *Rattus rattus*. *Biogeography* 7: 97–102.

坂田金正・高田靖司・植松康・酒井英一・立石隆・長谷川雅美・蔭山麻里子・浅川満彦 (2006) 伊豆諸島に生息するアカネズミ *Apodemus speciosus* (齧歯目ネズミ科) の寄生線虫類に関する初報告およびその種構成の特色. *日生地理会報* 61: 135–139.

Yoshino T, Kawakami K, Hayama H, Ichikawa N, Azumano A, Nakamura S, Endoh D & Asakawa M (2011) A parasitological survey of introduced birds in Japan. *J Yamashina Inst Ornithol* 43: 65–73.